

美味し国旅 伊達な旅 仙台宮城
観光をとoshした地域づくり
 ～「仙台・宮城デスティネーションキャンペーン」のその後～



宮城県で初めてとなる大型観光キャンペーン「仙台・宮城デスティネーションキャンペーン(DC)」が昨年10月から12月までの3か月間開催され、大崎市にも県内外から多くのお客さまが訪れました。合併して間もない大崎市では、新しく誕生した「おおさき」をPRする絶好の機会としていち早く準備に取りかかり、市内の各種団体による実行委員会を設立して多くの市民の参加によりこのキャンペーンに臨みました。

1月13日には、三本木ふれあいホールを会場にDCを総括するシンポジウムを開催しました。



パネリスト・コーディネーター

大江(鳴子温泉) 旅館の女将が女性委員会を立ち上げ、異業種交流を始め、いろいろな声を聞くことができた。

駅の待合ベンチに座布団を作ったり、駅の食堂だったスペースを利用して、旅行者が気軽に立ち寄って情報を得たり休んだりできる談話室のような活動拠点を作った。

ボランティアガイドの活動もDCにより活発になった。準備を進めていた矢先に発生した六月十四日の地震、五千件を超える宿泊キャンセルの嵐、それを知ったとき皆が本気になった。

リゾート列車の「こがね号」「おもいで湯けむり号」とそれに続く「みのり号」まで、お客さまのお出迎えは、皆の協力でできた。

観光地は活気がないと生きていけない。DCを単に観光の延長線にとらえがちだが、もう一度訪れたくなる魅力あるまちづくりをしていく必要性に気付かされた。

戸島(田尻) 最近、田尻にも多くの観光客が訪れるようになったが、地元の人には観光客と接することにまだ慣れていなかった。

田尻駅に観光用パンフを置いたところ、地元の人がそれ

伊東(三本木) 三本木と言えば、春の菜の花と夏のひまわりだが、DC期間の秋から冬は、何ができるのかと悩んだ。

若宮八幡神社の湯立神事、伊場野イモ、大豆坂地蔵、山畑横穴装飾古墳など、プレDCで反応が良かったため、本番でも取り組んでみた。

今回の取り組みで、地元にながら深く知らなかったものを見つけたことができた。

三本木は、国道四号の大崎市の南玄関、道の駅もあることからインフォメーションセンターの役割を担っていかねければならない。

皆川(松山) 松山には多くの歴史的資源がある。ボランティアガイド「まつやま訪ね歩きの家」が中心となり、街中の見どころや史跡を巡るモデルコースをつくり、それを案内板にして地域の四か所に設置した。

四か所ではまだまだ足りないが、できるところから取り

組んでいくことが大切だと考えている。

十月にSLが運行した際には、一ノ蔵の振る舞い酒や松山金津流獅子躍でお客さまのお出迎えをしたが、三日間で延べ千人以上が参加したことは非常に良かった。

だが、住民のDCに対する意識や理解はまだまだ低かったと感じている。

これを今後の糧として、これから観光開発を継続していきたい。

高橋(古川) 古川では、部会に分かれて取り組んだが、飲食部会とマップ部会は顕著な活動を行った。

一般の人にも取り組みを理解してもらうため、マップ部会で作成した観光マップを古川地域の全戸に配布した。

観光物産部会では、お客さまにマップでスタンプリーをしていただくよう工夫し、全体としては効果があった。

毎年秋に行っている台町商店街の街かどいも煮会にも首都圏をはじめ、広い地域からの参加者があったのもDC効果の表れであった。

また、地域に眠る観光資源の掘り起こしも行った。

こうした、各々の取り組みをつないで相乗効果を上げることが大切ではないか。

で勉強してくれて、困っているお客さまの案内をしてくれた。

また、蕪栗沼のツアーでは参加料をいただくが、ツアー前には「そんなに取るの」といっていた人でも、ツアーの後では「これは安い。ありがとう」と言ってくれた。

普通ならお金をいただく私たちが言う「ありがとう」を逆に返された。こうして参加者と濃密なつながりが持てた。

清水 話をまとめると、一つは「DCとは何か」ということになりす。

DCとは、お客さまに大崎市を訪れていただき、おいしい食材、自然、歴史、それらを堪能してもらい、経済効果を上げようというものです。

それは、温泉宿に泊まってもらうだけ、イベントに参加してもらっただけといったものではないのです。

現代の観光客は近くに何かないかと常に探しています。何もなければなくて、いろいろな宝物が次々に出てくる「大崎つてすごいところだ」ということにつながっていくのです。これを皆に理解してもらうことが重要です。

地元の人にとっては普段気にかからないような場所や生活で

も、お客さまには宝物であることが多いのです。

皆が認識するということは地域が一つになるということにつながります。

二つ目は、横のつながりが大切だということ。観光のことは観光協会であればいい」ということではないのです。これからはDCのときのような活動を続けてほしいです。

三つ目は、大崎の中でのつながり、多くの旅行者は鳴子温泉に泊まります。その途中で立ち寄った道の駅で鳴子温泉の案内をもらう。これは当然のことです。そして、温泉宿では、周辺地域を案内してもらいます。ということでは、大崎のことを知らないければ案内できないわけです。もつと地元を知っていただきたいです。

知事には、「DCが終わったばかりですが、すぐに次のDCに手を挙げて」と進言したいです。今すぐに手を挙げても次は四年後です。

今年のDCは新潟。新潟では今、宮城を超えるDCにしようという動きになっています。DCが大崎市にとって成功であったかどうかは、今回培った知識や連携を生かし、それを実行に移せるかどうかにかかっているのです。

多田(鹿島台) 皆で楽しくという思いで取り組んだ。互市には、遠方からたくさんのお客さまが来てくれた。互市の楽しさは、売り手と買い手との駆け引き。

私たちが案内しながら、交渉できずにいるお客さまと一緒に「もつとまけてちょうだい」と普段の買い物にないやり取りを楽しんだ。

また、互市でのコンサートも好評だった。にぎやかな所には人が集まるものだ。

終了後も、メンバーを増やして地域に密着した活動を続けていくことにしています。今年には互市百周年に向けて取り組んでいく。

真山(岩出山) 戦国武将ブームで、鑑試着体験は好評だった。

大きな収穫は、地域内、さらには外部とのネットワークが構築されたこと。

岩出山では、実行委員会とは別に企画委員会をつくって、毎月一回情報交換を行った。これにより観光関係者だけでなく、地域内に協力してくれる人のネットワークが生まれ、無茶な話にでも協力してくれた。

こうしたネットワークを今後の地域づくりに生かしていきたい。